

披沙揀金附錄

七

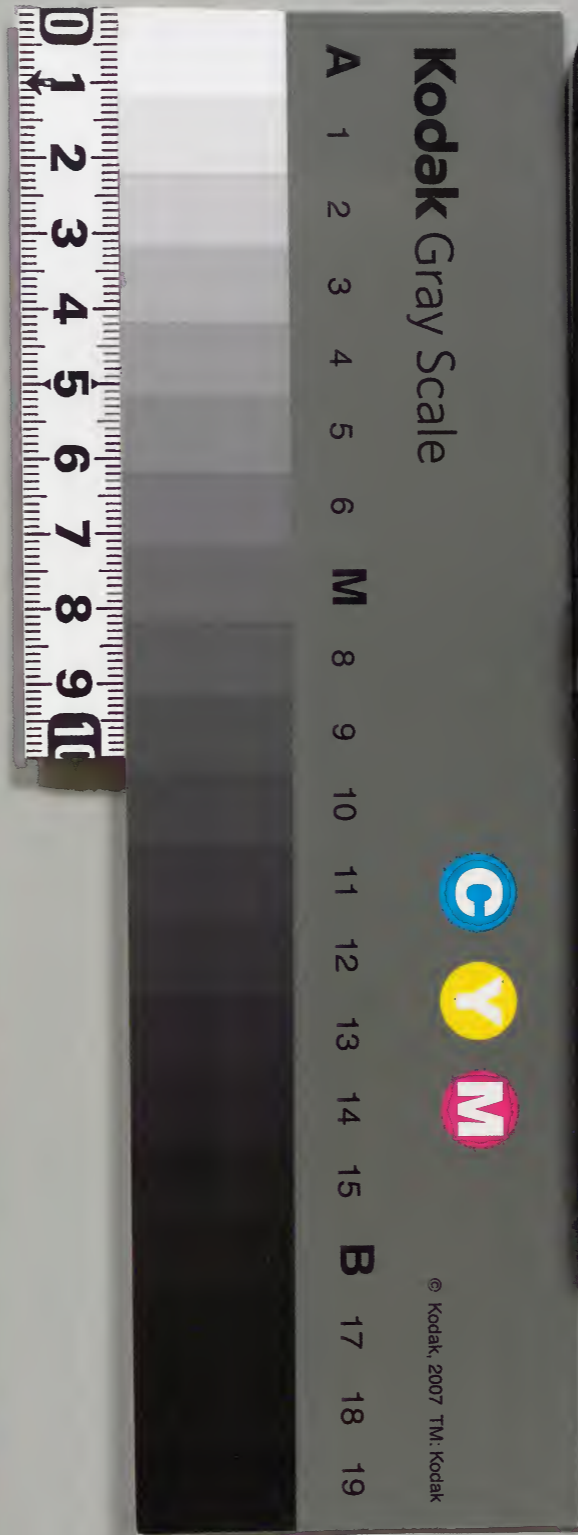
竺

共廿四



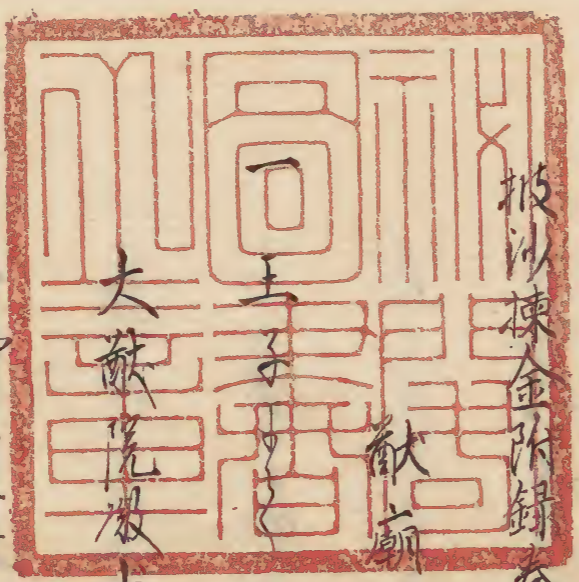
庫	文	閣	內
一五九	三三二	三三二	和
四架	三冊	九號	

內閣文庫	
番號	和 33169
冊數	34 ( 33 )
函號	159 60



頁234

披沙揀金附錄卷第七



猷齋五

王子

大猷院殿大進物上覽事畢

出御二三町

其後

の宮の

あま

中上より江戸のくく御輿違居き上意より  
由小還御より夫より王子御殿の色贈物も由  
止中上由北條新蔵故安房出  
古の布北條新蔵御物頭より明日御先香  
正作舟より前日は作出より明日は作より  
ん當番れより中上より上より正作舟  
少少の當番より中上より可なり  
之へ系より

大猷院殿上意より中上より御先香勤より

先安房より由中上より前橋當  
蔵聞書

一 大猷院殿松平大岡より犬追物正作舟王子より  
新より小屋掛上見より其布御信代危何茂由  
より

將軍家ハ簾下より見物より何ハ信より由何  
より代りの

將軍ハ簾下より少く乙物ハ我々の簾上より上見より入

少く上表をり御白衣をり御譜代元御目之は作付登  
御前御酒を下以其内より大進物古所小幸是より御酒等賜  
此為成り方跡より何氏酒盛仕し上言より此御は而  
をより大進物典約の内上より出火給事脱失は古所於  
火事より後方より申しとや不進山寛永  
小説

一 御麻打の時御譜代元御供より百連自身に能く作付小由寛永  
小説

一 寛永十一年十月

將軍家投擲し御麻打の數千人の列卒林と更老

白くし竹と白持廻る其中の猪麻糰丸の類數段  
幼く御麻打の決事以纏と立一組より傳へて  
多しと猪麻成

將軍家の御前より押請る其衣裝皆綾羅錦縞と飾る  
其花番目と登り申し松平伊豆守信綱阿部豊後守忠秋  
等御前より唐大古成猪糰丸放追し下りし成留しむ  
其勝負送物より大古より際りしより御麻成御前成  
さしして是の御前

將軍家清駕より出清あり清長刀成りし其勢

其より其早業見替り考詰言成りし清近習の面々

弓或鈍大方と云し麻と留寄ありしうつて見物なり

清機場快然より皆杯酒と賜ふ夜に入還清あり

九延  
実源

一 寛永十二年四月

將軍家板橋より有清持中抽數餘多ありあり及言還  
清あり

將軍家清浴室より入りぬたまふ村より久庵法師

清湯殿より後仕合清を湯取之何と云ありあり久庵

甚熱一然と云

將軍家此湯と云たまふ然とも熱湯より好す故に別

方一甚清肌赤事の云あり後之甚由念慈あり別

阿部豊後守忠秋成りし作云久庵父子三人 兄は六郎門  
中基前後人

次男善宗  
中坊主あり 早死罪より云ありの上意あり忠秋畏

退守り暫く有し忠秋清近習の人と同云予既こころ清

忠孝は死して久庵父子の罪科を承け得た各の  
泣き如く何れや人云死罪に於ては上意成  
すといふ者人云く時徳を承けしや餘人よ能しとや徳と  
不承し善忠孝云重而用之——清氣色沸快然と云  
初——  
既し死罪に當りては即母進長等私語云君之命  
ハ彼死罪に赦免之事と申上りて云夜入

將軍家清氣色沸快然と云則進長忠孝母之母に

忠孝母前より申上りて云先し久庵父子三人死  
罪に承けし然も君の中忠孝を忌懼し  
嚴命を承けし如何と云

將軍家より、母詞を承けし小を暫わしハ丈鴻ハ  
流し——  
死刑を遁了奇——  
死刑ハ三奏を承けし後ハ是れ所不承——  
今忠孝の慮遠し——

將軍も忠秋、再び死罪の品と竊ふ志と奉り

死に死刑、不當の過と争へた、よ誠、君臣

合弊の政事、世に在り感之 元延 実録

一 赤湯殿の坊主高木善宗にありて持てしむる

大猷院殿作りしふにえき、たふ湯をへ、桶と

水、心持、おこなひ、上意に、くき、ま、ハ、の、え

多し、ま、り、け、の、死、罪、く、い、れ、諸、人、も

い、り、あ、謀、り、け、席、お、仕、ふ、事、思、ひ、く、遠、流、せ、し、

り、其、後、大、教、り、り、し、も、い、彼、者、と、教、帳、の、め、せ

御、前、く、く、久、世、大、和、る、廣、之、讀、あ、き、り、ふ、り、

中、せ、り、赤、河、な、り、ま、い、その、次、と、讀、ん、し、せ、

と、酒、井、禰、は、る、傍、り、い、く、右、り、り、今、一、を

と、く、し、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、

り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、

り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、

り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、



讀む〜〜上意を待り〜のせ〜

作舟〜〜武野燭談

一 正保元年二月廿五日

公方様小園井山柄の本山番所〜〜猪狩〜成  
〜由兼〜依は作出供奉の面〜用意〜代官  
下〜書〜出は今日知〜刻彼下所成候〜筆ハ竹  
杖を以〜有〜彼山と圍苑所荒番小代官〜危  
一手〜に圓右をま〜の付違装束其倚

為天候難す由迄等の面〜中〜その射子ハ麻  
矢を投結麻の束成お付候子と破〜んと走り候よ  
松平伊豆守河部豊後守〜由致〜大古候を〜あ  
多〜ハ之正〜して止るもあ〜河多〜ハ三正〜して止るも  
あり送物あり〜さる大ハ四五正〜して御〜止る其後ちん  
小紙付の大小飛車雷大向として由秘苑の大小正あり  
此之正ハ毎度一正止め候よ由機嫌不斜申〜も飛車  
と云由大ハ勝れて大丈更なり〜あり〜大も〜あり〜

腹くわく可きり来て勢を破らんとする所と二人近  
牙を付けて投捨くわく上意は後て花車成る彼大  
猪の向方走り掛して其鼻頬と食ふ猪は鳴し犬とをけ  
一は解投する落る成文亦放して投り夕程は犬之腹割  
破して忽ち斃死す其後為忠して自ら雷と云由大と放  
する猪は殊鳴して走り止る雷猪の右の耳とくわくて左の耳  
投越り程は猪は斃くわく然とも亦猪起して振放し  
り夕成雷今度ハ左の耳とくわくして右に飛越り紙すすして

猪成喰部くわく

二方様由る成を就して静し由長刀より猪成斬殺し  
ゆ由機場不斜其後彼由長刀より猪成と多く由羅  
は折しとくわく由傍の石中も皆猪成と止り由物數  
若干なり故に又還清氏家記  
一 家光公御書に云々しれり秋冬よりあつてハ方々  
ゆ多見と云は露屋の志強成由直し由は吹さ折れ其以  
由中より金助と云ては是成老あり春の由由お早し

て清城上りの屠鴨の袋と見せよ。は巻して其報子と由安  
は折し必其首は由臺所近出清由とと孫志をせしめて  
金助は其唐ははる五一舟も由出遊守る由云々袋袋ととい  
とも終よ由申間あし成由唐袋一上り事あり其巻法の  
所き由子ともふ勝計名將名  
言記

一 寛永の以由書物の由清のわり傳馬町成通くせ給し  
ある家よ年寄付くる男あふれ給い給て余念なく  
福りりりる成あをせわきの人と云々と由後して何事

よやと由尋者りるに今日ハ意比頃議として上下亦夢先  
酒冷しありの男持来と碑刻して少成由先拂のわり故  
色しよしてわりしとも目覚る中りしてまや由通り  
よ及少彼も入んとはわるとくおれあまうりたるよと  
はと申けれはそれらるよも事なり程と酒とたよ  
者下り給らんとして由書物の鳥と云羽下り給りりり  
一町の老威よたへすり今よよまきり廿日の日ハ由忌日と  
その議云とやめぬとて窓のす  
は見え加

一 大猷院様所代所置場と所免と有る事ハ所法度  
より所置場とぬすむ事ハ苦しき事と所内意  
所例所出所の面ハぬすまれしとなり或所隅田  
川第所置野と所觸有之付永井所前所後目黒  
所置場より所き多十三所せ所らり所急に  
成せらるるに依り所前所矢ハ所の枝とやん  
より所所り所是れ所と所見出ハ所なれ所置人ぬ  
所前所出より所上意より所所例ハ所上の所置人と

作せらるる豊前中上よりハ所今所隅田川ハ所成せ  
る所と有し何として所方ハ所所出所所所や所あり所  
多し所所所せらるる所上意なり所所所し所上  
置人ぬり所所ハ所豊前所所所所置所ハ所  
上意ハ所所置所すれ十三所所所由所中す所上意  
所を所くハ所所所所所今日の所所所所所所す  
所所所として所所所所所所所所所所所所所所  
所所所所所所所所所所所所所所所所所所所

とあり  
寛元  
開書

一 寛永の以由野に由り世終て不意に道の側なる寺に  
へり世終て由りてあり一は細細も寺内の土境  
よへて居睡して在り一はく者て天井の中より  
宛子母ふ能よやと云變り一はれも一はきん思ひお  
られ一はきん一は有て板敷制一被て一はきん  
女の親事なる物見て驚つて隠り一は百物見此  
よ一は中よ一はれり一は由り何の由り一はも無り

一 一は箱にて後其事一は中出り一は後一は老い一は遊一はま一は  
可然と云上者一は母のやとよ女犯一は禁す一は彼一は  
法なり一は方の法一は破一はす一はその一は一は彼一は  
法一は彼一は一は一は一は一は一は一は一は一は一は一は

寛の善法見  
追加

一 浅草一は清成一は音小寺一は由り一は由り一は由り一は由り一は由り  
壁一はさん一は亦一は付一は有一は之一は一は一は一は一は一は一は一は一は一は一は  
一は

清例の右のさし成婦人之の白を見し十七八計成  
女老もて成吾れし居申此段中上は雨よはうあつき  
は柱也等移り成還所以後も何の清例法も無之  
七八十日迄し又清成も首被寺へ清奇は柱は持由  
たつ縁は成少の寺と立退の由中上は如何扱へ後して  
立退少成しは身は柱少の清例も先自女人身無は成  
達上園り故立退のよして者く由中上は如何扱へ家  
よしは少扱の小たましは世縁は柱れし天下の由は是て為

成成し上意あり  
寛永  
小説

一 大猷院様清野先より成方より不圖成せし  
座爰成上覧遊ハさるりし床のつこも板よさし成赤  
有り上意しハ此家ハ不物数奇成考有り常の座し仕  
くくハ然多しき扱し上意あり堀田如誓者度何の心  
なくつこも板成ありくくくねんハやあこまて  
凡こ取門あけ女中より此女騰成つり肉入らん  
加賀殿つりき行て見くくくく之階し物進し居る

様子あり加賀後津穿鑿可也  
少候成事ハ幸引在中上ニ後人申候  
あり今由寛成候として何と申  
候可也様として加賀  
成候由急うり候事も次第と申  
候可也  
寛元  
聞書

一 大猷院様由野先より  
又四郎清歩引取の母定し  
存候知より方々志願の  
為に成候事候可也

中上

上様も由信成り一度由  
申候事候可也  
知候事四五町由先  
由由由由由由由由由由

寛元  
聞書

一 家光公病後由願  
由由由由由由由由由由  
由由由由由由由由由由  
由由由由由由由由由由

新法外の持心我儘と思ひ給ふらん然と云ふも  
病後相毎氣清り成る故新に計ひゆと云作りし法  
よりあらずして由清成は中上の心やうの由は樂一  
と由成る後よき病の患一して侍の名成り取と中  
子細いやくのこころく身成持る能は座ゆし有事より  
侍の名成り取とまうす事には相又り常恒法活  
一のこはり善人の腰弱く成て用の持より多す  
さ有くとして体そのまゝよく寝ると中と成り肝要の

時張りよ相中にして後よまあるゆは張弛と肝要  
ゆ座ゆ人も常恒にお習ひ成り安仕まうりよして  
し命終りゆは天下の由改道は作付時ハ由表は成  
め初ゆは成とた〜〜くは持されき時ハ由体息は  
随ふゆは地と由器〜〜成ゆ座ゆ氣成は為善ゆて  
これ續きて事には誠は天地陰陽昼夜つれの道  
ありあ〜〜ん成と中よ〜〜れゆは由機極を成り能き  
由授授ありと聞人感〜〜なり

右の  
云記



一 大猷院様或村由彦清々以鷹のおき繩のやうなる  
脇髪長き糸と巻く物と此長さいふおと者了や  
急よ積てまひれと作せられ別清小性糸由細工約魚  
持糸被されいふはもり見られれとも限らふ  
き長き糸成巻くものあらは中々即村よい知り  
りし清前よりいひれそ世終に迷惑仕るる所信綱  
公系り終に其積りし即村よい成りし安き事  
ありし其糸と千尋いふして此糸目とりの付まき

成りしおの大巻の目成貫自り付善盤りし積り其  
長きと中あけられ即村よ坊の由横髪結る所なり

信綱公  
言行録

一 由彦述りし戸田彦助と云者あり甚

家光公の内多し叶ふ由多し一切の儀は何れも此彦助  
外り事ありは之由例述りし中奇評り  
りたふ留村威勢強く  
上様の御心よ叶ふる人酒井澄俊方志勝あり又

山崎野先きよし威勢甚し〜山崎中若戸田庄物  
鑿く考いあり〜を庄物ハ濠洲より及ふ〜あり〜  
山崎野先の山崎中〜濠洲より〜あり〜あり  
として若人庄物といひ〜して仇名よ山崎野先の濠洲  
あり〜として野濠波といひ〜して或時山崎野先より庄  
物と傳へ〜上意あり〜山崎野先の野濠波山崎  
あり〜と山崎野先の山崎野先といひ〜答て山崎野先  
あり

家光公不思議あり〜と云ふもの成と思ふあり〜  
即所用多作付甚日も山崎野先の山崎野先あり〜

山崎野先

家光公山崎野先の何某よ〜山崎野先あり〜けり〜山崎野先  
あり〜山崎野先あり〜と云ふもの成と思ふあり〜  
山崎野先あり〜と云ふもの成と思ふあり〜  
山崎野先あり〜と云ふもの成と思ふあり〜  
山崎野先あり〜と云ふもの成と思ふあり〜  
山崎野先あり〜と云ふもの成と思ふあり〜  
山崎野先あり〜と云ふもの成と思ふあり〜  
山崎野先あり〜と云ふもの成と思ふあり〜  
山崎野先あり〜と云ふもの成と思ふあり〜  
山崎野先あり〜と云ふもの成と思ふあり〜  
山崎野先あり〜と云ふもの成と思ふあり〜

上意よりしに庄助と若き者も仇名に野程と附申し  
其子細八程し申すに色々々の容成家にて人と感  
比共こゝろに庄助も野先よりハ成ハ義成と又ハ楠  
あし成荷いし農人より化し多成とまゝに彼野程と  
申すに野さぬきよりハ吾の産物と申す

家光公此由と名寄相我聞損しありしよ減し野程  
の理聞えりとの作より亦あせしまうふそれより  
して

上様も庄助と成野程と申すに庄助は今の仇名ハ  
野渡波あれをさし難し上段村の少是より申すあり  
又言田邊の清成の村名田平兵衛と云人と言名予は体居る  
内より申す見之後りる田高成汝馬よりハ・宗是り  
為量次第より可宗取也り而と海より興ありしとの作  
あり評兵衛畏て馬より赤系能場而と宗是りしてお願  
せし今の右田主様にて彼地と領せし其村も評兵衛  
ハ形のみくの由氣よりあれは宗是りしる而も勿論宗是

さうも所もなきに...  
二百石も可有之其外下爲爰爲此例迄き迄の思の終

及岡  
秘録

一 大猷院様御代由尊迄久岡殊存由意より入る考と  
あり其冊代何事も酒井澄波が殿上裁す仁赤りれり  
久岡ハ由るるのよその澄波殿と云心より野澄波と自  
澄せしとあり以筆上受久岡め野さぬきと自  
澄すもと笑古上これとて由機場悪し冊子

永井日守忠康史ハ由聞古之より由尊の野程と申し由  
久岡の面成由鏡ありとされし一能くさぬきと申す由と  
十上る由史より由機場直とせられ誠と程と能くさる  
つゝ久岡と作られ其後ハさぬきと申す由史ハは程と

寛元  
聞書

一 家光公毎度由尊野より由成り初小野久岡と云り由尊  
迄望き者故由駕の昭しと由尊途りて路次申す由由由  
あり或冊由意りぬり由代尊より切考ハ誰か有氏と由尊

此種久内形より其以旗本よりして身はやりりれハ切者多  
よりして河内もあしく唯今程をやりして旗本より切者  
有事ハ無事歴れと中上。朽木氏約少博苦く〜事或  
中上〜旗本〜と稱す〜と袂或抑〜内院〜と稱す  
旗〜知〜

上様久内と歩法〜、は為名少故内澄〜と中上様無之  
新在清意は取〜ハ旗本に身切者有之氏大谷之内社  
〜有之〜更程〜旗本〜内〜等〜〜若の者或〜上意

の交久内も形並りりれハ本より少智有之のありハ  
別由清〜け。上意〜通由色を給ハ由旗本野切者  
有之〜中城ハ教度由野〜ハ為成由野の合抄或  
由野色〜ハ作或ハ麻村或ハ〜ハある又ハ卷乃  
出折足の踏振多〜の多掛着色〜の由海新〜給〜  
由供〜元形〜面〜自然〜切考〜新成私野前〜  
合中〜形〜唯今〜卷〜見阿〜〜〜  
〜色〜の理屈〜中〜理屈〜至極〜計〜

又故由旗本ハ少少其功有之由歴代大名家の故ハ一  
 のり管進由歴代故功有之ハ中中由旗本の振ハ  
 無由歴代ハ上上ハ其ハ由旗本もよく其振もて  
 有之由歴代振ハあり物ハ中上振ハ其由歴代有  
 上様の由旗本も其ハ中上事ノ流石ノ所前  
 述ノ其在由旗本も中上事ノ其ハ其故ノ諸人感  
 有之あり  
名物名  
云記

一 大猷院様清野先生ノ教誡ハ其ノとき見付て

者あり内田信流ノ教ハ其ノ時付穿鑿致する割堀田  
 加賀守殿ノ教ハ其ノ時毎日の清野先生ノ教ハ其ノ時  
 する心あり清野先生ノ教ハ其ノ時其ノ時其ノ時  
 心者其ノ時其ノ時其ノ時其ノ時其ノ時其ノ時其ノ時  
 事とあり  
寛元  
開書

一 由歴代長ノ其ノ時其ノ時其ノ時其ノ時其ノ時其ノ時  
 宛其ノ時其ノ時其ノ時其ノ時其ノ時其ノ時其ノ時  
 も由よせ其ノ時其ノ時其ノ時其ノ時其ノ時其ノ時其ノ時

下由 寛永  
小説

一 大猷院様御意に在る物と目利は其大猷院と一物と目利  
は成去りあて等由自身は御田川筋へ成り去る由  
御意に合入持立しては御意にも御損少くは御目利  
の御意より合は成り知し見事しとありゆとあり  
候へは御意に久用之御好と云々と御意なきれ共職し  
して御の目利も御好味しとあり候へは御意に届成  
ぬともありしては御様無事とあり候へは御意に候へ

其母永井見方とれは御意に候へは御意に候へは御  
理しは如何と上意あり候へは御意に候へは御意に  
もさへ御意の旨取とけ候へは御意に候へは御意に  
由前より候へは御意に候へは御意に候へは御意に  
等々何して御意の如く目利では御意に候へは御意に  
は御意に候へは御意に候へは御意に候へは御意に  
上意とあり 寛元  
開書

一 関東盗賊多有之達上受如何と御意に候へは御意に

何の汚沙治も之を其後中野野一と爲成此若諸人  
形之山前も汚例も若はお窺の八氣も十上の盜賊も穿鑿  
之後如何は成し中野野一は合迫し之國究成  
厭し随ふし汚用捨多程少一有程文お止す即て治前之者  
有之致迷惑も留上之汚費も少も中野野一急度穿鑿  
しし少人しは作也何も汚治之面も亦之も合迫し作也  
其之後不審存の如し下之國究しは思石汚用捨實心  
雖有年少宛上六人々之故も随ふ致穿鑿盜賊之扱

三は之由中合来より汚穿鑿其之内に盜賊止すこと止む

由 寛永  
小 説

一 大猷院極清代常州に盜賊多し其村に迫り盜賊を以  
し其事あり町奉行より之支配ありし事多く  
自廻りさうりよつて盜賊を以し作付少程し預あり  
淺草筋由野野先し之浦志摩を敵其村に若年一寄  
ありしに盜賊止すこと上意ありり今止す中  
以免角に盜賊存しと爲し不し作付少しハ成すこと



町奉行も海軍預りし中上上意よりいささかいささか  
取上げしあり志摩守河と取上げり事属せん合志仕  
ら申ありと申上りしるるいささかあり志摩守合志仕  
りし上意あり河とも合志仕申し申上りし上意より  
盗賊の起る本ハ公儀私儀の外あり一其所と致し仕  
為る百姓ともし盗賊とさす世制一丈と考つぬるもハ  
不届者あり常例の所代官不大名の所北こりこり取上  
りし洪人笑ことしく陽言なりし上意とあり其以後

御城よりいささか成志摩守盗賊ハ止ぬと申上りし上意  
あり志摩守出請すもいささか申上りし上意あり  
了りし上意とありいささか野先よりの上意隠れなく仕  
所代官中傳受し諮りし依此支配不届く申付盗賊の  
改つよき改し早速止しとあり減し大度あり

由一云あり  
寛元  
聞書

一 大猷院様隅田川節一涉野一出所直し堀田加賀守  
一 たり成るは作出加賀守殿其支度成調一其村落系と

云栗乞の馬よあけり急ぎ、津逆のくぬ隅田川より右  
よ津佐の面くひしと並居る中とゆきやれしく  
あけりあけりさあけりし津前よ出くくく免角の上意も  
あくぬ棧場不直還津あけり加賀者殿由云云もくく  
すぬ面目よりくくくく事と忍れし登城由次よお  
詰くく河の由沙汰もあくく四つ過てせきはくくひの新  
由身よ達くくくくくくや由次よ指くく誰くくの上意あり  
朽木氏約少捕はくく上ハ加賀者よし由産は今日ぬ河振の

後津棧場よ遠ゆや由云云も由けあきれすぬ棧場  
不直津振子お息えゆ付還津直よ由次よお詰み奉  
しゆ上くく其村加賀者よくく上意ありゆくぬ前よ由  
ゆくぬ村よ加賀者ハ道心と企くくの上意あれくも  
あつしゆ上くくんくくくくくく今合意く上意ハ  
今日隅田川より右よ移し津人の前と糸打波ぬ加賀者ハ  
は合結くくし由次とす皆の考をハ前代より津用よた  
ちくく考の末なれくもあは合よしあぬ通りあり加賀者

よふあやとてしして念ふと思はざる者ありて  
此憤り上りて通し河元の舟吾々用よき事一然に加賀  
ハ逆心ありて私ある事ハ憤りとしくも吾々  
ことあやしるものいふく論すべし是れ用よ  
き事也若し吾々どうもむしきみと興す事也  
逆心同意ありてやとの上意あり加賀舟以の由  
あれハ此慢心と佛押へ決人爲服一若し清若云  
ありと云  
寛元  
開書

一 大猷院掃清尊野先小といふ清は置の事とさみかて  
直自安代若し者あり中根寺收守取次小て上覚小  
ゆふ吾事と書しるは上意小て如何扱とも上意あり  
と人とも清若と憚りし者ある故早速菴舎中付  
る程経ても兎角の上意あること依て清老中直自安  
若し者ハ如何小可中付やと相窺ひる事小ま何者  
そ清覺えらるるれいの上意ありと云ふと中よる  
其時上意小ハその書付内小一條ありて用也應こ

車あつゝ八徳美と云々も用小立なる事と云ふと  
書付たり不仕合者なりとの上意小て何の清結めと  
かうりりとうり 寛元  
閑書

一 正保元年正月二十九日

幕下隅田川清成の時浅草川の瑞わく清鷹と翁と  
の石川中流小落く浮沉す時小本目権玄清著の  
儘わく川小飛入て取揚る堀田加賀守被箱より小袖と  
出く興へる同二月初日本目と清座の間へ召れ黄金三枚

母服等たまひる此舟よりい由事最壯年の華并由徒水  
練の事不可念由作出されり 野  
宿  
物語

一 家光公小川如(は為成り最由春より)鴨と合せり  
由事場々因縁の事ありは清の外寒一氷の  
上ありよよつしてあきん母よ由徒水より一人水中よ  
飛入あしあく由事と云へ鴨とより揚水たき  
およき付たり)物も重きん一ある働き是は由事  
よもて新と等々思ひ由事よ何の由事ともあくも

昭々年の冬水立は好しありし其最も彼らとて  
この事の上意ありし其後水立法に付水立の共の  
名と作を付しその働とあめりし其後水立と  
たてめくの働と出す事有し又其考ふ水立の  
ものとも之能くししてしよと是とまはれり  
あゝん軍旅とちうふ多量ありしりい下くの身と  
厭ふ所極しと思ふとこゝろは尚座のふくさゝし一命  
もえりえぬやうにすくゝありしきありたれし

然し其働といふ賞ありし上意ありしとや  
集 額波

一 大猷院殿南田川一 沖野野は為成し一 風流く吹来り  
沖野具しし水母方つは為入沖勝水水急きし其最  
鯉し沖吸物は石上はれし汁汁し研有して沖立版  
ましし沖産可成し版切しせよとの上意し其版  
内田信流書は中渡村に沖産可成し其最  
砂ののりき振こりし水糸もきし暖ありしては

増し其汚料理の不便は今日汚膳所へ汚入は軽しと直  
し汚膳所上は振り少作山の野より汚入は軽しと水  
も亦少振真しと右の上は汚吸物故今日の風より出月  
こりりより汚口は汚懸り砂掛り汚口中は少入りとな  
る汚口水は軽し以後は汚吸物より砂水産の切腹を  
是とも折首ありともて其成切腹とてよりりより  
汚口水は汚懸り中上より受と中上は倍汚るをささく  
其趣中上の上急よとて或て有りありとして水持  
て

上急有之汚水は少軽其上より元前の汚吸物より上より  
砂水ありとありり付さる事と上急よとてよりり  
とあり在左邊へ余危りりり事ありり其後少軽にて  
在左邊へ汚水は情中りり付二面石汚加増は下りあり  
又武井川へは為成少り付於本在左邊へ其紙少紙し紙に  
角田川へは為成少り付に彼地へ汚膳所お世とより作  
出り少故り急きりんとすりり千倍の大橋成渡り汚  
膳所へよりりすりり橋結りり白汚あり世よりり前へ

大勢浄膳の道具持人古久行等々持して  
新在邊の中々合点廿十廿一  
程より白多浄道具の音に響く妙花先ぬ浄機場以外の  
損一信流ちると石河とてあのころく大勢の人殺さるに  
走り白多と追立り成と浄多あり其村新在邊の中折取川  
あり白多川一浄成は好少一白多も追立り事も云々  
又千位へ走りて新在浄膳浄多に合点廿少一其村水志  
く成交すの同く浄多うりと交りあり一白多成

追立り浄膳着上腰切りり分る増とる管法の中上ぬ浄  
ありし浄機場よく水膳は石上水庭へ新在志と新在  
来る定し水志うりと是悟極め新在しよ折川より  
遙々の水付け大義も思召す浄膳の浄多をうき事成  
神妙あり一信之浄濁は下並れとて水笑は折水橋二成  
お欣せり 挿聚 雑談  
一 家光公浄代々事うとよ折川筋遠うけの浄多持者  
けりら口の渡一と水歩の審入誠くく一其村も

浅くうけられ熱波——と波す——として先代統士組より  
沿う流り流り流るに流石の大河故ありあけ漸減の若  
付の案経あり——と河系とや云代統士河刀筒と持り  
如河思ひらん川越——と河刀筒と持せ刻くまを取引して  
流——と河系と河経——とありて流る智く河鈕と離  
て離人より持す糸不吟味と極急度中付よりの上意と  
取う彼歩引のものに河原——として立腹切しりり今もその  
よしと云流——とあり——とあり——とあり

燭 信

一 家光公河代山登野之若石の川成波母河刀筒持り  
者筒と川越と持せ糸と河刀筒と上覧者て我差智く刀  
と離人より持す糸不吟味と極急度中付よりの上意と  
よしと云流——とあり——とあり——とあり  
宗と河刀筒と持し糸の作り得てあつ湯  
と河刀筒と持し糸の作り得てあつ湯  
遠島よりあり——と河代統士組のせし久世大和  
酒井澄俊の河系と持し糸の作り得てあつ湯



ゆりせし水云系あり申す次をよまんとせし時後  
忠勝招より今一度讀みしし中申又よまるとは機  
無き見えけり申す讀みしし時より相も讀し云  
よまらせ上意と待て次と讀せしり申す教し上意者  
りりしあり 閑意 悔話

一 涉野先より涉歩の若ふと働の能者有之少い  
組以涉前へ石歩の目付より中付あり上意又涉前  
より中腹よりなり 寛永 小説

一 涉野より毎日は為成り付涉信且く旅日涉本九法  
以候ふみ涉料理は下由 寛永 小説

一 家光公自然と涉野氏好せり故政事の内遣りい  
在り一涉成ありて故事より或日千石第一成せり  
涉野遊りしり此日奥州の准國を評達中納言  
政宗系勤りし千石足掛て江戸へせり政宗家人  
主人の中りい今日い

上様此邊一涉成の由涉法仕りる唯今の内通り過す世

中へ極し由駕籠と早めさせ平ししよ政宗等しりやと  
よめも不々急政宗次第しよ々条と云し系物しり都々し  
千石の由習場と折返しり

將軍家光公の如何も例のこころの由立付しり由拳し  
鷹と居しさせりし唯此一人、鼻中しり麻札と居しさせりし  
由腰袋掛させりしし折首由逆習の士有皆方々一散く  
涉例しり一人もなし政宗駕籠の内より

上様と見たりしり有不知顔しり系物しり往還通し

也

家光公も涉目しり留りあの系物に定て政宗あらん何し  
し系物よりしりしりさるやし不審しり思石しり其目  
終日由教習しり善に及し還所あり其後中細云政宗  
系物く由礼しりあり登城ありし

將軍家光公政宗しり上意ありしり先自予千石へ習野  
しり中しり其方しり見ぬありしり通しりしりあしり由戲しり  
極しり作せりしり政宗謹しりしり上りしり上意のこころ

其日ハ私五所より一系勅のしめ由當地人若はり少ぬ

上様由成之由承りし改道し氣と付少く有るも由迄智と是

しき人しに思掛不し只當中し由迄道と是しき者一人

奉し由と居て床机し腰掛を在る其外は何者とも思掛不

しし云上せしる

家光公圖をされ其當中し居しつゝこれ予ありしと

室にされ改宗あり初はて換りし由往りや努と不存之不

調法ははましつゝ忌あしし由是見し上度減りし之方し

由野のしは為成は其先し一由迄智のまとも不は古連只由人

由地廻りしは持事し其の不可知也

上様し中なるは天下の由一人しし千万金の内身ありむ古年

の清代しは名中如何あり野人の考りしは輕く發地廻りせ

中し由野先き成窺ひしし事し雖計

上様し見たりしし賤き者ありと直訴はしんも知しし

ハハ由野先きし中在由迄智の士とおぼし放されは由則

しは古連由をしし存ありしと志ししししし

家光公政宗は中条をよと思召しの上急ありしと云  
及聞  
秘録

一 或村目馬込之内野ありて申の上刺還所の内権あり  
りる如し麻布白銀の臺より疋丈の小舟詰りし  
上様の還所とも知りし系通りりると

將軍家内覧し折首内傍より小姓内小納戸元表乃  
内役人あり如りり内儀りりるよとあの男女傍を振舞うな  
誰ある切し弁よりの上急ありしと申付石谷十花  
畏し蒐考して彼男と馬よりり下りりる十花心し思ひ

りる心を上急よの斬て弁よりの内ありあれを此考定て  
今日の内儀と不知しして系打りりるなる人教へしして  
殺すハ内仁政の道よありす且内役のありなる打擲  
しして遊遊さしやと思ひ彼男と投倒さんとすよ此男  
中身の固め能く其上力も有し不倒頓て十花と押並  
へて四子よ無事し組む組れて十花屹と足と踏張り元来  
力量ハ勝れしりお撲も上急あれハ染り身の固め力量ある  
成見して是は若ありすしと心付てお撲の事と出りし

員一と曳や考と申して捨合ひなり。

上様は床机より由腰と掛くれば見物あり。一、尚も勝負の  
付たり。一、

家光公の声と掛させぬ十花大腰より掛ようけよと由り  
あれは十花畏しゆと云ふもあらず大腰より掛る。一、  
ついでに動と投出。一、透さず上へ糸掛りて拳と握る  
脊骨と四つ五つ擲りれば彼男石叶とや思ひん馬成弁て  
跡とも不見遊。一、

將軍家基由様境走十花出。一、一、一、由腰美は軽又よ  
且直。一、還所あり。一、一、登白は石十花昨日の働神妙。一、と思石  
一の清りゆし。一、其合時版と賜り。一、名物も彼匹まの芝筋。一、  
て名取のお樸取ある由と云ふ十花染と害せざる。一、事

何れも答り。一、一、一、  
及聞  
秘録





